

中 学 校

平成 2 6 年度

教育研究員研究報告書

外 国 語

東京都教育委員会

目 次

I	主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	2
IV	研究の方法	2
V	研究構想図	4
VI	研究の内容	5
VII	研究の成果と課題	24

研究主題 「段階的指導を活用した学習意欲を高める指導の工夫」

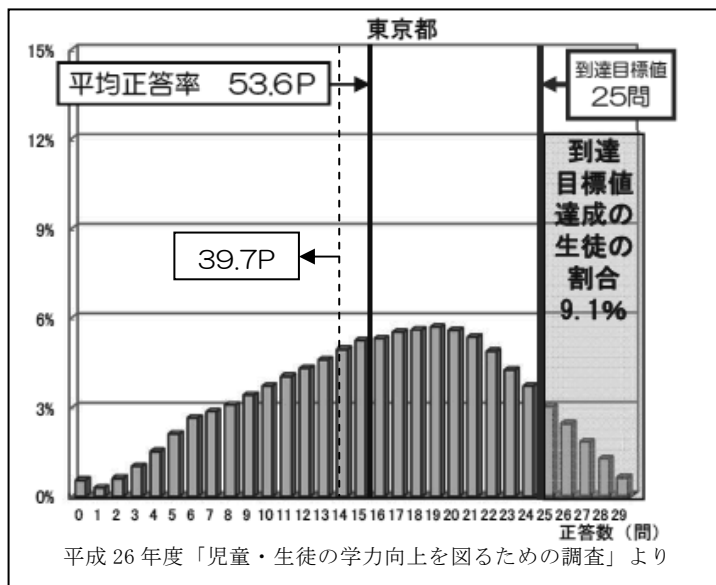
I 主題設定の理由

本研究では研究主題を「段階的指導を活用した学習意欲を高める指導の工夫」と設定した。主題設定の理由は以下のとおりである。

現行指導要領では授業時数と指導する語数が増加した。各学年とも授業時数が年間 105 時間から 140 時間に、指導する語数が従来の 900 語程度から 1200 語程度に増加し、言語活動の充実を通じて、言語材料の定着を図るとともに、コミュニケーション能力の一層の育成が求められている。

生徒の学習意欲については、OECD(経済協力開発機構)のPIISA調査など各種の調査から、成績分布の分散が拡大していること、学習意欲や自分への自信の欠如に課題があることが挙げられている。

東京都の生徒の実態としては、平成 26 年度「児童・生徒の学力



向上を図るための調査」における生徒を対象とした意識調査で、英語の授業が「どちらかというとなんか分からない」が 21.7%、「ほとんど分からない」が 8.6%という結果が見られ、分からないと答えている生徒は 30.3%いることが分かる。また外国語<英語>調査では「中学校英語の平均正答率に対して-5%に達しなかった生徒の割合は 39.7%」という結果が示されており、自信をもって授業に取り組めていない生徒が一定数おり、また成績分布の分散が東京都においても見られるということが分かる。

これらの現状を踏まえ、教育研究員の所属する学校において、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」のうち、どの技能に関して自信をもって授業に取り組めていないのかを把握するために、生徒に 4 技能を得意な順に並べ、その理由を記入させる形で調査を行った。今回の調査は、教育研究員の所属する 10 校で実施し、1 年生 319 名、2 年生 969 名、3 年生 232 名、合計 1,520 名分のデータを回収、分析したものである。その結果、3 ページの結果のように、特に「話すこと」、「書くこと」の 2 つの活動、つまりアウトプット活動に対して自信がもてない現状があることがわかった。生徒の挙げた自信がもてない理由は、「間違っていたらどうしようかと不安になる」(「話すこと」)、「語順がなかなか頭に入らない」(「書くこと」)等で、アウトプット活動に自信がもちにくいという結果は、どの学年においても共通であり、生徒のペーパーテストにおいて測られた理解度が高くても、同様の傾向があることが生徒の回答よりわかった。

前学習指導要領から引き継がれた「生きる力」のうち「確かな学力」は「生きる力」を構

成する3つの要素のうちの1つとされている。学校教育法では学力を「基礎的な知識及び技能」、「課題を解決するための思考力、判断力、表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」としており、主体的に学習に取り組んでいく「学ぶ意欲」は「確かな学力」に必要な不可欠なものである。

そこで本研究では、「学ぶ意欲」を下支えする自信を生徒の中に醸成させるため、生徒が苦手意識をもちがちな、「アウトプット活動」に着目し、英語を学ぶことに自信をもたせる手段として、段階的指導のモデルを作成することを目的とし、研究主題を「段階的指導を活用した学習意欲を高める指導の工夫」と設定した。

II 研究の視点

「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】（文部科学省平成23年5月）」では、外国語の指導において、「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの学習活動や、文法事項等の言語材料について理解したり練習したりする学習活動を充実する」としている。

本研究では、充実が求められている「互いの考えや気持ちを伝える学習活動」であり、生徒が自信をもてずに取り組みがちなアウトプット活動「話すこと」、「書くこと」に対する生徒の意識を肯定的なものに変化させるための手段として、生徒の実態に合わせた段階的指導（スモールステップ）を与え、小さな成功体験を積み重ねることが有用と考えた。そこで、「考えや気持ちを伝え合うことができること」を目標として、段階的指導（スモールステップ）のモデルを利用した指導の充実について研究することとした。

III 研究仮説

生徒の実態に合わせ段階的指導（スモールステップ）モデルを活用し、生徒の取り組みやすさを考えた指導（得意意識の高い、インプットである「聞くこと」、「読むこと」から、アウトプット「話すこと」、「書くこと」へ、難易度は易から難へ）を行うとともに、理解から活用へつながる指導（スパイラルな指導、計画的・系統的な反復練習）を行えば、生徒は考えや気持ちを伝え合う（アウトプットする）ことを積極的に行うことができるようになるだろう。

IV 研究の方法

1 基礎研究

生徒がどの技能に自信がもてないのか調査するために、教育研究員の所属する学校にて「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の技能を得意な順に並べ、その理由を記入する調査を行った。アウトプット活動に自信がもちにくいという結果は、どの学年においても共通であり、生徒のペーパーテストにおいて測られた理解度が高くても、同様の傾向があることが生徒の回答よりわかった。

(表1) 生徒が不得意と考える言語活動

	1年	2年	3年
対象人数	319人	969人	232人
聞く	64人 (20.0%) ③	209人 (21.6%) ③	49人 (21.9%) ③
読む	37人 (11.6%) ④	125人 (12.9%) ④	27人 (12.1%) ④
話す	66人 (20.7%) ②	290人 (29.9%) ②	57人 (25.6%) ②
書く	152人 (47.7%) ①	345人 (35.6%) ①	99人 (44.4%) ①

※教育研究員の所属する学校で平成26年5月から6月にかけて「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の技能を得意な順に並べ、その理由を記入するアンケートを行った結果の中で、第4位（最も自信がもてない）と回答した生徒の人数を表にまとめたもの。

2 調査研究

基礎研究で行った教育研究員の所属する学校でのアンケートで、アウトプット活動「話すこと」、「書くこと」に対し、生徒には苦手意識があることがわかった。そこで、生徒がこれらの活動に自信をもって積極的に取り組むことができるように、段階的指導（スモールステップ）モデルを2つの視点、①生徒の取り組みやすさを考えた指導、②理解から活用へつながる指導の視点から協議し、作成した。

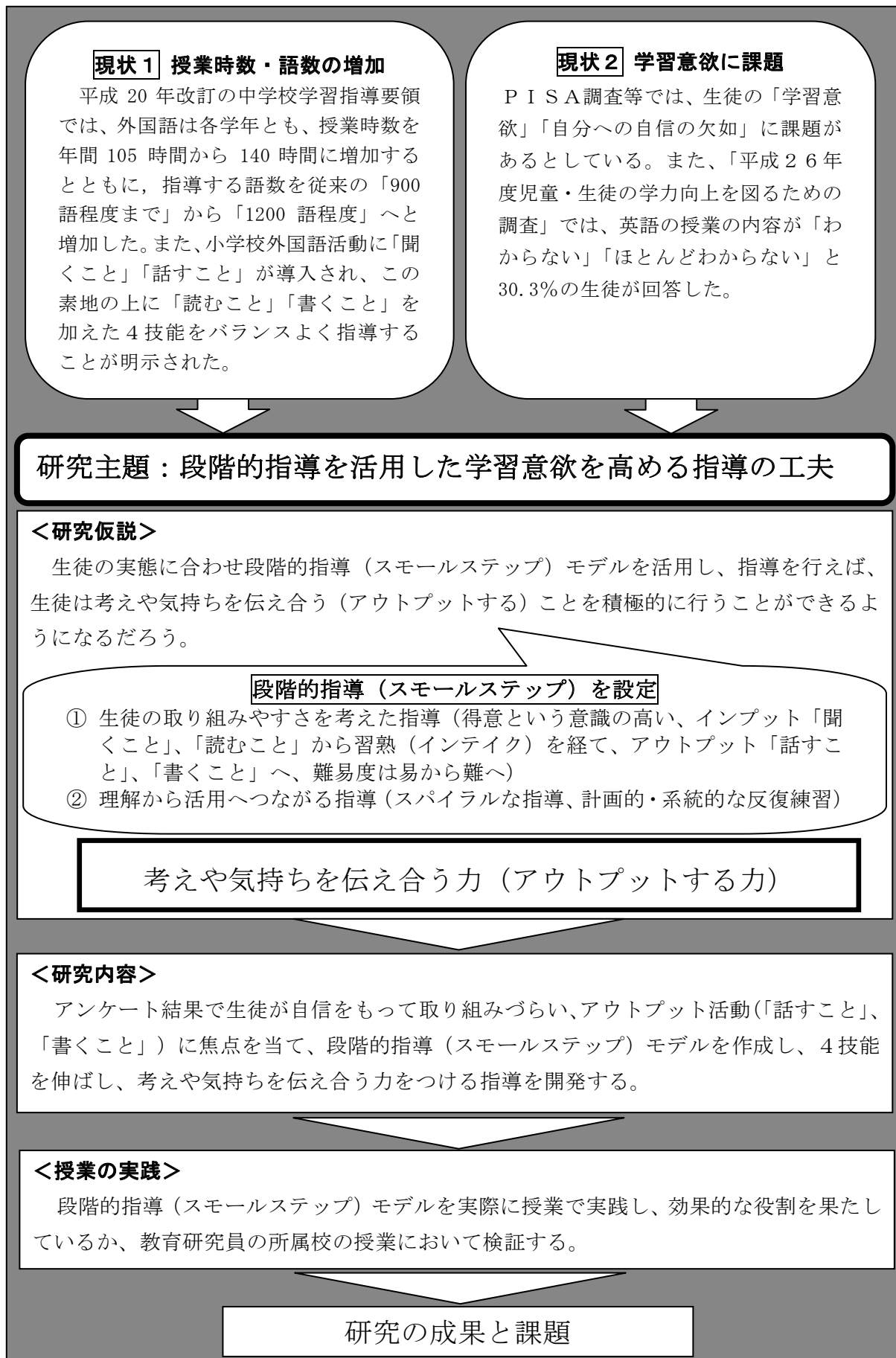
3 授業の実践

調査研究で作成した段階的指導（スモールステップ）モデルを使った授業の実践を行い、段階的指導（スモールステップ）モデルが効果的な役割を果たしているかどうかを、検証した。

4 研究成果のまとめ

段階的指導（スモールステップ）を活用して実際に授業に取り組んだ際の指導の工夫をまとめ、その具体的指導事例を検証授業Aとして9ページに、検証授業Bとして16ページに挙げた。そして、教育研究員による検証授業における生徒の変化等を考察し、研究の成果をまとめた。

V 研究構想図



VI 研究の内容

教育研究員所属校で実施したアンケートから、「話すこと」、「書くこと」という活動に対し、生徒の苦手意識が確認された。その一方で、「自分で考えたことを英語で話せるようになりたい」、「英語でメールや手紙などを交換できるようになりたい」といった、「英語で自己表現がしたい」という意見が多数見られた。

本アンケートを基に、国の言語活動充実の方向性も踏まえ、本研究では「考えや気持ちを伝え合う力をつける」ことを目標として設定した。この目標を達成するために段階的指導(スモールステップ)を設定し、4技能を無理なくバランスよく伸ばしていく工夫を行っていくことで、生徒に自信が付き、学習意欲が高まると考えた。

そこで本研究では、研究仮説に基づき、段階的指導(スモールステップ)のモデル作成を行った。段階的指導(スモールステップ)の条件として、得意という意識の高い、インプット「聞くこと」、「読むこと」からアウトプット「話すこと」、「書くこと」という流れを前提に、①「活動は易から難へ」、②「スパイラルな指導、計画的・系統的な反復練習」という2つを設定した。

この2つの条件を設定する際、2点について留意した。1点目は、教科書等の使用教材によって、また教員や生徒によって授業は変わるものであるため、普遍性の高いものにした点である。2点目は、実践しようと思った時点から、すぐに段階的指導(スモールステップ)を取り入れた授業を行うことができるようにした点である。

以下に、上記の2条件を念頭に置いた段階的指導(スモールステップ)を取り入れた授業(単元)を作成する手順と、その際に留意すべきことをモデルとしてまとめ、検証授業A・Bにおいて効果を確認した。

段階的指導(スモールステップ)を取り入れた授業(単元の指導)の手順

- ① その授業(単元)の目標を決める
- ② ①で決めた目標を達成するための、「アウトプット活動」を設定する。
- ③ 下記のチェック項目に留意しながら、②に向けた指導過程を考える。

段階的指導(スモールステップ)チェックリスト

(①「易→難」、②「スパイラルな指導、計画的・系統的な反復練習」)

	項目	2条件
1	<input type="checkbox"/> 活動で使う既習語句・文法の定着度を確認する。 (→定着が見られない場合は、定着を図るための活動を導入時に行う。)	②
2	<input type="checkbox"/> オーラル・イントロダクションを行う。 ※6ページ～7ページを参照	①②
3	<input type="checkbox"/> 十分な音声インプットを確保する。	①
4	<input type="checkbox"/> 既習事項を活用する場面を設定する。	②
5	<input type="checkbox"/> 新出表現を習熟(インテイク)させる。	①②

考えや気持ちを伝え合う力(アウトプットする力)をつける指導

1 本研究における「オーラル・イントロダクション」の活用について

オーラル・イントロダクションは、教師が既習の語彙・表現を用いながら、分かりやすく口頭で新出の内容を提示することによって、教科書本文や新出文法等の導入を行う指導方法である。

オーラル・イントロダクションの利点は、本研究で考えた「聞くこと」→「話すこと」、「読むこと」→「書くこと」に沿って、学習内容を段階的に理解させることができる点及び、既習事項を反復学習できる点である。例えば、まず、教科書本文の内容や目標文の内容を教師の発音で「聞くこと」、教師の問いかけに応答することで「話すこと」を行った後に、実際に英文を「読むこと」を行い、扱った文を自分の言葉で言い換えて「書くこと」にもつなげることができる。(検証授業Bを参照)

オーラル・イントロダクションでは教師が一方向的に説明するのではなく、教科書等の絵や写真を利用し、生徒に英語で簡単な質問をして、生徒に考えさせ、答えを引き出しながら段階的に物語を理解、整理させていくことが重要である。生徒と教師とのやりとり(インタラクション)により、教師は生徒の理解度の確認をすることができ、必要に応じて、その場で説明や練習を補うこともできる。

例1 教科書本文のオーラル・イントロダクション

(1) 教科書本文のオーラル・イントロダクションの目的

- ・本文を理解するための動機付けを行う。
- ・本文を理解するために必要な語彙を導入する。
- ・本文を理解するための背景知識を与える。
- ・本文の概略を理解させる。

(2) 教科書本文のオーラル・イントロダクションを教師が考える際のポイント

- ・新出事項、既習事項を把握する。
- ・生徒が理解しやすい発問の表現、類推しやすい発問の順番を考え、シナリオを作成する。
- ・生徒が、既習事項や教師とのやりとりから得た情報、教師の提示した絵や写真の情報を活用して類推できるようにする。
- ・音に集中できるように、文字の使用はなるべく避ける。
- ・日本語は極力使用しないようにする。
- ・代名詞はなるべく使用しないようにする。(生徒が答える時には人称代名詞を使用する機会を意識して多く作り、復習させる。)
- ・重要な文は繰り返させる。

(3) 教科書本文のオーラル・イントロダクション例(職場体験を扱ったレッスンでの導入場面)

T: Everyone, you all had a work experience in September. Do you remember about it? S1, I know you worked at a bank. S2, you worked at ○○?

What's **a work experience**? (a work experience は強調してゆっくりと言う。)

Ss: ああ、「職場体験」！！

T: That's right. Repeat after me. *A work experience.*

Ss: *A work experience.*

T: Good. S2, where did you work?

S2: I worked at a hospital.

T: Oh, you worked at a hospital. S3, where did you work?

S3: I worked at a library.

T: Oh, you worked at a library. Good. Next, look at this picture. (教科書の絵を提示) Who is this boy, S4?

S4: He is Kenji.

T: He is Kenji. Class!

Ss: He is Kenji.

T: Where is this place, S5?

S5: A supermarket?

T: That's right. A supermarket. What did Kenji have?

S5: 「職場体験」!

T: English please!

Ss: A work...

T: *A work experience.* Repeat.

Ss: *A work experience.*

T: *Kenji had a work experience.* Class.

Ss: *Kenji had a work experience.*

T: At?

Ss: A supermarket.

T: Kenji...

Ss: *Kenji had a work experience at a supermarket.*

T: Yes, *Kenji had a work experience at a supermarket.* Repeat.

Ss: *Kenji had a work experience at a supermarket.*

オーラル・イントロダクションを行っている様子 (検証授業Bより)



例2 文法事項のオーラル・イントロダクション

- (1) 文法事項のオーラル・イントロダクションの目的
 - ・新出の文構造に気付かせる。
 - ・新出の文構造で表現できる意味内容を類推させる。
- (2) 文法事項のオーラル・イントロダクションを教師が考える際のポイント
 - ・新出の文構造の文を複数例示し、繰り返し聞かせ、誤解させることがないように意味を類推させる。
 - ・学校生活やその時点で話題になっていることなど、生徒が身近に感じ、分かりやすいものを題材として活用する。

(3) 文法事項におけるオーラル・イントロダクション例 (What time ~?)

T: I'm sleepy. I get up at 5:00 every day. Are you sleepy, S1?

S1: No, I'm not.

T: How about you? Are you sleepy, S2?

S2: Yes, I am.

T: I get up at 5:00. *What time do you get up?*

S2: *Seven.*

T: Oh, you get up at 7:00. Repeat *at 7:00.* (at を意識して発音する。)

Ss: *At 7:00.*

T: *What time do you get up, S3?*

S3: *At 6:30.*

T: You get up at 6:30. *I get up at 6:30,* class.

Ss: *I get up at 6:30.*

T: *What time do you get up, S4?*

S4: *I get up at 5:30.*

※以下、同様に複数生徒に質問を繰り返す。その後、(生徒の名前) gets up at 6:30. につなげる。そして複数生徒に聞き、主語を名前や he, she にしてリピートさせる。

検証授業Aの様子



2 段階的指導(スモールステップ)チェックリストの活用例 I

〈一単位時間の授業実践、検証授業A 10 ページから 15 ページを参照〉

段階的指導(スモールステップ)チェックリストでチェックされた項目とそれに対する活動

1 活動で使う既習語句・文法の定着度を確認する。

(→定着が見られない場合は、定着を図るための活動を導入時に行う。)

既習語句を即興で活用できる生徒は少ない。そのため、以下の帯活動（短時間で行う継続的な活動）を行い、習熟（インテイク）させることにより、本時のアウトプット活動をスムーズに行うことができるようにする。

活動① 数字の定着から時刻を伝える表現の確認 → 数字カードを用いた帯活動

活動② 動詞（日常の動作）の確認 → フラッシュカードを用いた帯活動

2 オーラル・イントロダクションを行う。

活動 本時の導入となる” What time do you～?” の表現を導入しながら、質問の仕方、答え方、レポート活動の方法を例示する。

3 十分な音声インプットを確保する。

活動 オーラル・イントロダクションによって十分な量の音声をインプットする。

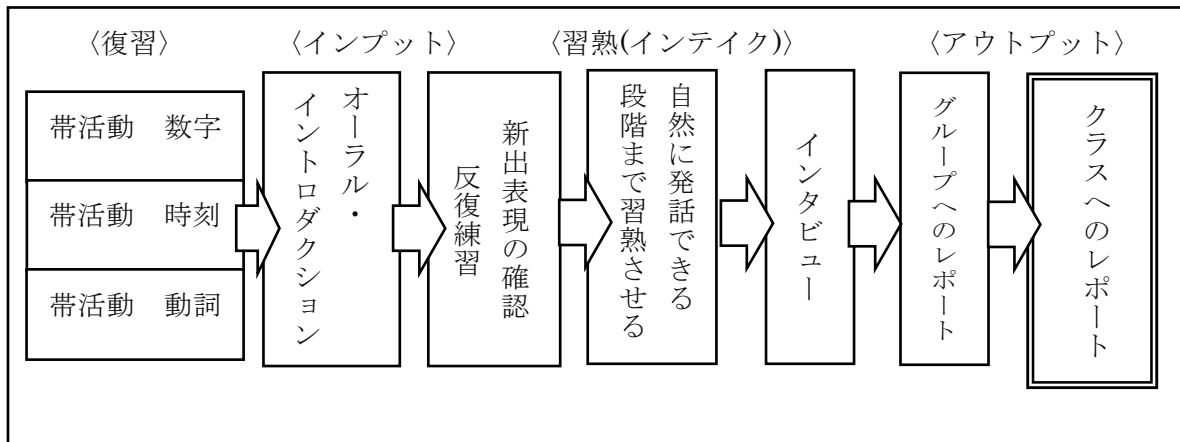
4 既習事項を活用する場面を設定する。

活動 授業始めの帯活動で確認した数字、動詞を活用して、友達が何時に何をするのか3人称の文で表現する。

5 新出表現を習熟（インテイク）させる。

活動 教師とのインタラクションで何人か指名していくうちに自然に文構造を学ばせ（8 ページを参照）、生徒同士のインタビュー活動で反復練習することにより、自然に発話できる段階まで習熟（インテイク）させる。

授業の組み立て



3 検証授業（第1学年）

(1) 使用教科書 *TOTAL ENGLISH Book 1*（学校図書）

単元 Action 2 “何時ですか？”

(2) 単元の目標

- ア 時刻などの表現を正しく聞き取り、分からなければ再度聞き返すなどして理解できる。
- イ 場面に応じた表現で話したり、与えられたテーマについて簡単な英文で自分のことを表現したりできる。
- ウ What time do you ~?を含む、時刻に関する表現を正しく理解し、適切に運用することができる。
- エ 時差に関する知識を得る。

(3) 単元の評価規準

観点	ア) コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ) 外国語表現の能力	ウ) 外国語理解の能力	エ) 言語や文化についての知識や理解
単元の評価規準	①ペアやグループ間で協力して積極的に言語活動に参加し、コミュニケーションを図ろうとしている。 ②間違えることを恐れず、意欲的に英文を言ったり書いたりする。	①What time do you ~?の表現を用いて、正しく話したり、書いたりできる。 ②場面に即して適切に音読することができる。(後日ALT授業) ③既習事項を踏まえて英文を作ることができる。	①What time do you ~?の表現を用いた文を聞いたり読んだりして、その内容を理解できる。(ワークシート) ②教科書の内容を正しく読み取ることができる。(後日定期テスト)	①What time do you ~?の文構造を理解できる。 ②時差に関する知識を得る。

(4) 指導観

ア 単元観

本単元のねらいは、時刻を尋ねる表現を学ぶことである。言語材料としてはWhat time do you ~?の文構造を初出として扱う。What time is it?や、前置詞の使い方、3人称単数の文等、既習事項を活用しながら、What time に一般動詞の疑問文を組み合わせた質問文を作ることができるように指導したい。

イ 教材観

言語材料の導入については、オーラル・イントロダクションやワークシートを用いて文の構造を理解させながら、会話練習を通して定着を図る。地図や絵を使用しながら、実際の時差を紹介することで興味・関心を引き出したい。

(5) 年間指導計画における位置付け

本単元のポイントは時刻を尋ねる表現である。本単元の前に扱う Lesson 5 では 3 人称単数現在形の学習を行う。そのため、人称による文の構造の違いも復習しながら What time ~? の文構造を学習させたい。また、後日行う「私の一日」という Reading、12 月に行う Whose ~? の文、年度末に行う「Show & Tell」及び「手紙で使う表現」などに活かせるよう、1 ~ 3 人称までの文を場面に応じて使い分けができるよう練習させる。

(6) 単元の指導計画と評価計画

	学習活動・学習内容	評価規準
第1時 (本時)	数字を時刻の形で言う。 What time do you ~ ? の文構造を理解し、時刻を尋ねたり、答えたりする。 1 日のタイムスケジュールを尋ねたり、答えたりする。 友人にタイムスケジュールを尋ね、得た情報を第三者に伝える。 その内容を英文で表す。	ア① イ①③ エ①
第2時	時刻に関する英文を聞き取る。 時差に基づいて、ワークシートに従って海外にいる人の様子や行動を言ったり書いたりする。	ア②イ③ ウ②エ②

(7) 研究主題との関わり「段階的指導を活用した学習意欲を高める指導工夫」

生徒に付けさせたい力は自ら進んで伝え合う力である。そのために、新出文法を用いた質問・応答 (What time do you ~? とその応答) からさらに主語を 3 人称単数現在形に変えた報告活動に広げる。活動の難易度を段階的に上げながら授業を進め、最終的に書く作業まで行わせる。

本時の主な活動は What time do you ~? を使った質問と応答、および 3 人称単数現在形を用いた第三者への報告活動である。この活動を行う上で必要な既習事項は、数字、3 人称単数現在形、What time is it? の表現であり、これらは事前の授業の帯活動で学習してきた。

第1時では簡単な数字の復習や動詞の確認から始まり、段階的指導として、一般動詞の文と時刻を合わせた表現を導入し、簡単な会話を行うことができるよう指導する。また、人称を変えながら友達について説明する機会も設ける。

第2時では、第1時に学習した文構造の変化に注意させながら時差についても考えさせる。その上で、場所を表す表現とともに世界のいくつかの地点の時刻を表現できるよう指導する。

(8) 本時

ア 本時のねらい

- ① What time do you ~?の文構造を理解し、友達に尋ねたり質問に答えたりする会話を、相づち表現なども用いながら自然に行うことができる。また、聞いた内容を第三者に伝えることができる。
- ② 自分や友達が何時に何をするか、3人称単数現在形や前置詞 at に留意しながら話したり書いたりすることができる。

イ 本時の指導課程 ※指導過程にある①から⑤は9ページの①から⑤に対応

指導過程 (time)	学習活動	教師の指示/留意点	評価規準 教材教具
1 Greetings (3 min.)		英語であいさつする。 天気や曜日を確認。	ア① 観察
2 Warm-up (8 min.) ⇒①	Q&A を友達と 3 回以上行う。 カードを見ながらリピートする。主語に応じて語形を変化させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・Q&A を行わせる <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Q:What time is it?</div> <ul style="list-style-type: none"> ・カードを使って数字の確認を行う。 1～12、15、30、45の順 ・カードを使用し、動詞の練習行う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">get up, come home, go to bed</div>	Q & A ワークシート、数字のカード、フラッシュカード
3 Oral Introduction (3 min.) ⇒② ③ インプット	<ul style="list-style-type: none"> ・何時に起きるか ・何時に帰宅するか ・何時に寝るか を質問し、答える練習	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">What time do you get up?</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">I get up at 7.</div> 教師との会話を通して、What time do you ~?の英文の意味、使い方を感覚的に理解させる。 レポーティングの方法、表現活動の準備をさせる。	動詞のカード、 get up , at のカード
4 Explanation (5 min.) ⇒④ ⑤	教師の質問に日本語で答えながら、理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・What time do you ~? で「何時に～しますか」という意味になることを理解させる。 	get up, come home, go to bed, at, 主語カード

<p>習熟 (インテイク)</p>		<ul style="list-style-type: none"> • I get up at 7:00. を板書し、答える際、時間の前にatがつくことを理解させる。 • I を He に書き換え、主語が 3 人称単数に変わったので動詞に s がつくことを理解させる。 	
<p>5 Pattern practice (5 min.)</p>	<p>教師の日本語を英語に直す。</p>	<p>What time do you (get up/come home/go to bed) on Sundays? I get up at 7:00.</p>	
<p>6 Activity (10 min.) ⇒5</p> <p>※自分で考えた質問を行うことで、アウトプット活動にもなる。</p>	<p>※グループ以外のメンバーに聞く。</p> <p>A: What time do you get up on Sundays? B: I get up at _____. A: Oh, you get up at _____. B: What time do you get up on Sundays? A: I get up at _____. B: Oh, you get up at _____.</p> <p>I get up at 7:00. She gets up at 7:00.</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 日曜日の習慣的な行動の時間を書かせる。Sundays のsに注目させる。 • 会話の流れを確認する。 • ペアで会話を行い、英文、会話の手順など活動が円滑に行えるか確認する。 • 自分の時間を書かせる。グループ以外の生徒と対話するよう伝える。 この際、さらに詳しく聞く表現や相づちを打つ表現を活用しているか確認する。 <p>数人に再度行わせ、文を受けて教師が She gets up at 7:00. などと 3 人称単数現在形の S を強調する。 3 人称単数現在形の文はリピートさせる。</p>	<p>ア① イ① 観察 ワークシート</p> <p>イ① 観察</p>

7. Reporting (8 min.) ⇒ 5 習熟 (インテイク)	A: -- gets up at 5:00. -- comes home at 8:00. B: -- gets up at 7:00. など。以降繰り返す。	グループ内で、クラス メイトについて報告さ せる。 表に書いてある数字を もとに、3人称単数現 在形の s および前置詞 s を意識しながら英文 を作っているか確認す る。	ア① イ③
8 Writing (5 min.) アウトプット	Ryo goes to bed at 11:00. Yuko gets up at 7:00.	友達への質問、答えを 1種類書かせる。 3人称単数現在形の文 (Reporting で用いた 文) を書く。	イ③ エ① ワークシート
9 Consolidation (2 min.)	What time do you get up on Sundays, Mr. Yokoyama? He gets up at 6:00.	その場にいる先生に全 員で質問し、全員で3 人称単数の表現を使っ て言う。 次回の予告をする。	
10 Closing (1 min.)		英語で挨拶する。	

(9) 授業観察の視点

- ア 段階的指導 (スモールステップ) を意識したものになっていたか。
- イ 授業の組み立ては、生徒にとって理解しやすいものであったか。
- ウ 生徒にとって、自ら進んで会話がしやすい雰囲気作りに努めていたか。
- エ Writing の作業において、3人称単数現在形などの既習事項を活用して書くよう促していたか。

(10) 授業を終えて ～成果と課題～

ア 成果

段階的指導 (スモールステップ) の視点から

- ・ インプット
授業始めの Q&A から Writing まで流れがスムーズであり、段階的に指導することができた。
- ・ 習熟 (インテイク)
帯活動として毎回同じ絵を使いながら表現の練習をした。また、十分な反復練習も行

うことができた。生徒はしっかり習熟した上でグループへのレポート活動に移行することができた。

・ アウトプット

生徒同士の会話活動を多く行う中で、自分のことや友達のことを伝えようという姿勢を見ることができた。

自ら進んで伝え合うという視点から

- ・ 自分で考えた動詞を書かせる欄があったことで、自ら進んで伝え合う力を養うことにつながった。
- ・ 後日検証授業を行った学級で行ったアンケートでは、5月当初よりも「話す」「書く」という活動に対して抵抗感がなくなったと感じる生徒が増え、過半数を占めた。

イ 課題

- ・ 段階的指導に着目するあまり、What time～?の文構造を理解させることという本時のねらい達成が不十分になってしまった。
- ・ 板書計画や視覚教材の準備が不十分であった。視覚に訴える教材を多用すれば、より確実に使用表現を習熟させることができた。
- ・ 最後に目標文を生徒に言わせたが、教師の言ったことを繰り返すだけになっていたの
で、定着を図るためにも、最後は生徒に自発的に言わせる流れが好ましい。
- ・ 語彙練習に時間がかかった。
- ・ ワークシートの自分で選んだ動詞を有効活用できたのではないか。活動で使う質問を
「聞きたいこと」と「聞かなければいけないこと」に分けることにより、より生徒が自
ら進んで伝え合いたいと思う気持ちを育てることができると考える。

使用したワークシート（例）

Let's enjoy English!
What time～?を聞いて友だちの目標日のスケジュールを確認しよう
①友だちに聞いてみよう（友だちに聞く、話す）

Q: What time do you (get up / come home / go to bed) on Sundays?
A: I (get up / come home / go to bed) at seven.

②書いてみよう（会話練習を文にして書いてみる）
・ まずもう一度会話の流れを書いてみよう
Q: What time do you get up?
A: I get up at six.

③書いてみよう（会話練習を文にして書いてみる）
・ 主題をIから友達に変え、グループで伝え方と書きかえてみよう
例) Ryo gets up at seven. He comes home at nine thirty.
She gets up at eleven. He plays video games at night.
上のRyo plays video games at eightだと読めます。

動詞	get up	come home	go to bed	watch TV
時間	Six	five thirty	ten fifteen	seven
例) Ryo	five thirty	seven	eleven	eight
	Six thirty	six thirty	ten fifteen	eleven
	eight	five thirty	ten	eight

この授業で扱った表現などは、後日定期テストで出題すること、また、「私の一日」という授業においても再度扱うことで、自分の言葉として表現できているか確認した。

4 段階的指導(スモールステップ)チェックリストの活用例Ⅱ

〈単元計画作成の実践、検証授業B 17 ページから 23 ページを参照〉

段階的指導(スモールステップ)チェックリストでチェックされた項目とそれに対する活動

1 活動で使う既習語句・文法の定着度を確認する。

(→定着が見られない場合は、定着を図るための活動を導入時に行う。)

活動① 1人称から3人称への文の書き換えの練習→ 帯活動

活動② 不定詞を用いた自己表現活動 → 各時の導入と復習活動

2 オーラルイントロダクションを行う。

活動 教科書本文の導入時に、新出文法を織り交ぜながら、使用する語句を精選し、内容に関して英文で説明する。その中で、生徒の作文の型モデルを提示する。

3 十分な音声インプットを確保する。

活動 教科書本文の音読、部分暗記を反復して行う。

4 既習事項を活用する場面を設定する。

活動 文法定着を目的としたペア活動の対話文や、教科書本文の対話文を、1・2人称から3人称の形に変え、説明文にする。

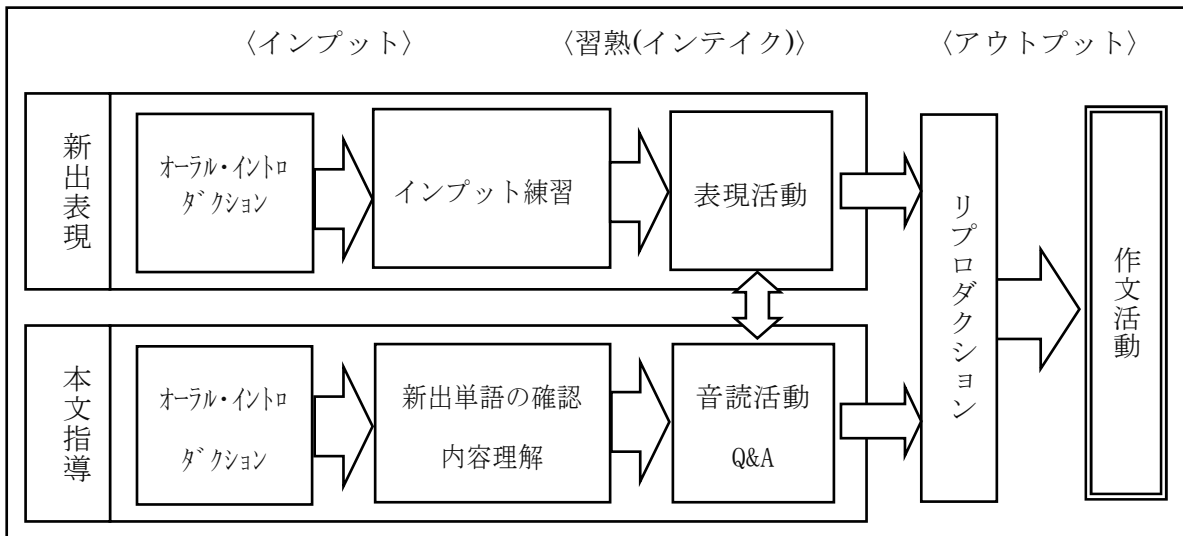
5 新出表現を習熟(インテイク)させる。

活動① 教科書本文の音読で、意味のまとまりを意識しながら音読できるよう、反復練習を重ねる。

② 教科書本文の内容に関する Q&A を通し、教科書本文の表現を定着する。

③ 目標となる英文を正確に書けるよう反復練習する。

授業の組み立て (単元計画については指導案を参照)



5 検証授業（第2学年）

(1) 使用教科書 *SUNSHINE ENGLISH COURSE 2*（開隆堂）

単元 PROGRAM 6 A Work Experience

(2) 単元の目標

- ア ・自分が行いたいことを言うことができる。（不定詞の名詞的用法）
 - ・行動の目的を言うことができる。（不定詞の副詞的用法）
 - ・何をするためのものか言うことができる。（不定詞の形容詞的用法）
- イ ・教科書本文を参考にし、まとまった量の英文を書く事を通し、職場体験と将来の夢について報告することができる。
 - ・今まで習った文法事項の積み重ねにより、テーマに必要な自己表現をすることができる。

(3) 単元の評価規準

観点	ア) コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ) 外国語表現の能力	ウ) 外国語理解の能力	エ) 言語や文化についての知識・理解
単元の評価規準	①ペアワークやグループ活動を通して、互いに協力し学び合う態度を養っている。 ②学習した言語材料を用いて積極的にコミュニケーション活動に取り組むことができる。	①自分の行いたいこと、行動の目的、何をするためのものかなど、不定詞を用いて書いたり話したりすることができる。 ②既習の表現 I think～を用いて自分の考えを述べることができる。	①学習した言語材料を頼りに、教師の話を聞いたり、教科書を読んだりして、職場体験や将来の夢の話を理解することができる。 ②友達の作文を読んだり、発表を聞いたりして、内容を理解することができる。	①不定詞の三つの用法（名詞的用法、副詞的用法、形容詞的用法）を理解し、活用できる。 ②場面に応じた適切な表現や人称代名詞を選択することができる。

(4) 指導観

ア 単元観

言語材料は、不定詞の名詞的用法、副詞的用法、形容詞的用法である。本課は職場体験を扱っており、保育園に行った由紀とスーパーで働いた武の体験談、桃子の将来の夢などが語られている。彼らの体験を単元の終わりに各ページの対話文の内容をピクチャーカードを基にして、要約した説明文に書き直させるリプロダクション活動によりまとめることで、生徒に自分自身について語るための文の型を身に付けさせる。

補足<リプロダクション活動について>

リプロダクション活動は音読の延長線上にあり、教科書の英語の定着を図り、文の要約を訓練する活動である。本授業では、リプロダクション活動を行うことによって自己表現の活動が段階的に高まる指導となっており、自己表現活動への段階的指導として有効であると考えた。

イ 教材観

本校の生徒は9月に職場体験を行っており、題材としては、自分と主人公を重ね合わせながら興味をもって取り組める内容になっている。不定詞を用い、単元のまとめとして生徒に自分自身の体験談と将来の夢を語らせたい。書く力を付けさせるための活動として、各ページの対話文の内容をピクチャーカードを基にして要約した説明文に書き直させる。さらに、ワークシートの最後に追加された設問に答える形で、不定詞の名詞的用法を活用して「自分の将来の夢やなりたいものについて」、不定詞の副詞的用法を活用して「夢の実現のためにとるべき行動について」の計2文を付け加えさせ、「自分自身の体験の報告と将来の夢」のテーマで、まとまった量の英作文を書くときの予行練習にする。

(5) 年間指導計画における位置付け

Program 1～5 では、未来表現の will や接続詞 that (I think that～)、義務などを表す must や have to～を学習した。Program 6 では本文に上記の言語材料が複数取り扱われ、さらに新しく不定詞の名詞的用法、副詞的用法、形容詞的用法が加わり、表現の幅が広がる。各単元で学び積み重ねてきたことを十分に活用させ、生徒に自分の職場体験記や将来の夢についての自己表現作文に取り組ませる。

(6) 単元の指導計画と評価計画

※学習活動・学習内容にある□1から□5は16ページの□1から□5に対応

	学習活動・学習内容	評価規準
第1時	Program 6① ・不定詞の名詞的用法の導入、練習 ⇒□1 □2 ・不定詞の名詞的用法を使った言語活動 ⇒□3 (インタビュー/レポート)	ア①② エ①②
第2時	Program 6① ・不定詞の名詞的用法の復習 ⇒□1 ・Section ①(55 ページ)の内容理解と音読 ⇒□3 英作文 Q:What do you want to be in the future? A:I want to be ~	イ① ウ①
第3時	Program 6② ・不定詞の副詞的用法の導入、練習 ⇒□1 □2 ・不定詞の副詞的用法を使った言語活動 ⇒□3 (インタビュー/レポート)	ア①② エ①②
第4時	Program 6② ・不定詞の副詞的用法の復習 ⇒□1 ・Section ②(57 ページ)の内容理解と音読 ⇒□3 英作文 Q: What do you have to do to be a _____?	イ① ウ①

	A:I have to _____ to be a _____.	
第5時	Program 6③ ・不定詞の形容詞的用法の導入、練習 ⇒ 1 2 ・不定詞の形容詞的用法を使った言語活動 ⇒ 3 (不定詞を使ったクイズ)	ア①② エ①
第6時	Program 6③ ・不定詞の形容詞的用法の復習 ⇒ 1 ・Section ③ (59 ページ) の内容理解と音読 ⇒ 3 英作文 I have _____ to _____.	イ① ウ①
第7時 (本時)	Program 6① ・教科書本文 (55 ページ) のリプロダクション (班活動) ⇒ 4 5	ア①イ① エ①②
2 学期 10 月～ 11 月	・リプロダクション活動で作成した要約文は帯活動として毎時授業冒頭で数人ずつ発表 ・テーマ「職場体験記と自己紹介」英作文	ア①② イ①② ウ②エ①

(7) 研究主題との関わり「段階的指導を活用した学習意欲を高める指導の工夫」

「職場体験記と将来の夢」という題でまとめた量の英作文(目標 110～130 語)を書き、学芸発表会で作品を展示するという目標がある。この目標を達成させるために、「書く」というアウトプット活動に生徒が安心して学習に取り組めるよう、どのように学習活動をスモールステップ化して積み重ねるかが重要である。検証授業Aが、1時間つの授業の中で指導の段階的指導を追求したのに対し、検証授業Bは、単元全体において段階的指導を追求したものである。

本時では、生徒が「職場体験記と将来の夢」という作文を書くためのスモールステップとして教科書本文のリプロダクション活動を行う。生徒たちはリプロダクション活動を1年生の2学期から定期的に行っている。リプロダクション活動には、本文のオーラル・イントロダクション、内容理解を的確に行った上での徹底した音読練習が必要不可欠である。音読練習については普段から意識的に取り組んでおく。オーラル・イントロダクション(口頭導入)及びオーラル・インタラクション(英問英答)は、リプロダクション活動の土台である。本単元のように会話文を扱う場合には、オーラル・インタラクションが1・2人称を3人称に直して練習する重要なプロセスとなる。教師の英語は、生徒の作文の型モデルとなるように精選することが大切である。また、Program6の対話文の特徴として、全て、Ms. Woodが質問し、由紀と武が答える形式になっている。由紀と武の答えを並べて主語を適切な形に変えれば説明文が出来上がる作りとなっているので、ワークシートを使い、生徒に考えさせ、整理させる。さらに、各セクションで、不定詞を用いた文を段階的指導としてしっかり書けるように練習しておき、リプロダクション活動として生徒の考えを2文加え、発表することで自己表現活動の文章の型を学ばせることができる。このような段階を踏んだ学習により、生徒のアウトプット活動「書く」に対する抵抗感が払拭され、最終的に自己表現する作文活動ができるようになる。また、段階的な指導を行う上で4人グループで助け合って活動させることも、生徒たちが安心して学習活動に取り組める要素になり、より学習効果が上がると考える。

(8) 本時

ア 本時のねらい

- ① 会話文で構成されている教科書本文を要約し、説明する文に言い（書き）換えることができる。（1人称から3人称への書き換え並びに適切な代名詞の使い方等）
- ② 聞き手を意識した内容を意識し、説明する文を考えて書くことができる。
- ③ 文章の構造と表現の型を踏まえ、「職場体験報告や将来の夢」をテーマに、まとまった英文を書くことができる。

イ 本時の指導過程

指導過程 (time)	学習活動	教師の指示/留意点	評価規準 教材教具
1. Greetings (2 min.)	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をする。 ・日付と天気を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体で行った後に、改めて数名に質問する。 	
2. Review (1) Oral Interaction (2) Reading (10 min.) インプット	<ul style="list-style-type: none"> ・本文 p. 55 を音読する。 ① Chorus reading ② Read & look up and say ・ピクチャーカードの英問英答を行う。(本文の Wood 先生の質問文をベースにする。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書 6-①本文を全体練習する。 ・Reproduction に入る準備のために本文をある程度覚える。 ・英語の質問に英語で答えさせる。 	※教科書本文部分暗記ワークシート 6-① Program6-① ・ピクチャーカード
3. Reproduction (1) Writing-A	<ul style="list-style-type: none"> ・会話で構成された本文のリプロダクションを行う上での約束事を確認する。 <p>A Program 6-①の文構造についてワークシートで整理する。</p>	以下の4点について確認させる。 ①「状況説明／登場人物・話題など」 ①「要点を整理し、端的な文章を作る」 ②「主語や人称代名詞に気を付ける」 ③「聞き手にとって分かりやすい説明文を作る」 A 生徒に考えさせ、答えさせながら整理していく。 Wood 先生の質問文が文の内容の要点を端的に説明していることに気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート①
(2) Writing-B (3) Writing-C (30 min.) 習熟 (インテイク)	<ul style="list-style-type: none"> 〈4人グループになるように指示〉 B 相談しながら説明用の英文を作る。 C ・挙手し、書いた文を次々と発表して、板書する。 ・どの文が最適か全体で考え、説明文を全員で完成させていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 〈机の移動〉 B 情報交換をしてお互い足りないところを補い合うように指示する。 C どうしてその文を書いたのか理由を言わせ、全員で考える材料にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート①② Program6-① ・ピクチャーカード ア- ① エ- ①②

4. Consolidation (7 min.)	<ul style="list-style-type: none"> 全体で一度読んでみる。 用意してあった不定詞の文を2つ付け加える。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の取組について気がついていたことをコメントする。 	イー ① Program6-① <ul style="list-style-type: none"> ピクチャーカード ワークシート②
5. Closing (1 min.)	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 順番に全員発表することを伝える。 次回の授業の予告をする。 	

※教科書本文部分暗記ワークシート…教科書本文の新出単語、重要表現等を空欄にして、繰り返し音読練習させることにより定着を図るワークシート。

(9) 授業観察の視点

- ア 本単元は段階的指導（スモールステップ）を意識したものになっていたか。
- イ 授業の組み立ては、生徒の思考の流れに沿って理解しやすいものになっていたか。
- ウ リプロダクションの作業の前に、文法事項や本文の内容を生徒が確認できる活動が十分に入っていたか。
- エ 生徒は教科書本文の文構造を理解し、作業を通して「職場体験報告や将来の夢」のテーマで作文を書く基本的な文の型を学ぶことができたか。
- オ 4人組の協働学習が生徒の教え合いを促し、学びに効果的であったか。

(10) 授業を終えて ～成果と課題～

ア 成果

段階的指導（スモールステップ）を設定の視点から

① インプット

- ・1年生の時から継続的に教科書本文の音読（Chorus reading →部分暗記音読シート）を行う事で新出語句、重要表現、既習の表現で大切なものを意識させ、覚えさせることができた。
- ・リプロダクションの前段階として、ピクチャーカードを使った英問英答を本時を含め、繰り返し行うことで生徒はスムーズに会話文（1、2人称が主語の文）を説明文（3人称が主語の文）に変えることができた。

〈生徒のワークシート①より・・・本文内容を整理する。（ ）内は生徒が記入〉

(例) ① (状況説明：登場人物・話題)

Q: What are they doing?

A: (Ms. Wood and Yuki are talking about Yuki's work experience.)

② (どこで働いたか)

Q: Where did Yuki work?

A: (Yuki worked at a nursery school near the soccer stadium.)

③ (何をしたか)

Q: What did she do there?

A: (She sang songs and played with the children.)

② 習熟（インテイク）

- ・ 会話で構成された教科書本文のリプロダクションを行う上での約束事を、生徒に質問しながら確認した。文章構造ワークシートで教科書本文の要点をまとめる作業がスムーズにできていた。
- ・ 生徒とどのような文章がよいか意見を共有するときに、つまずきやすい表現や意識した方がよい点について、教師の側からも机間指導をしながら生徒から考えを引き出すように質問を投げかけた。理解の一助になったのではないと思われる。

質問内容の例

○ 代名詞の扱い

文の主語を She ではなくて Yuki としたのはなぜか。

⇒前の文章の主語が Ms. Wood と Yuki の二人だから。

○ 場所の表現方法

there をどうするか。

⇒詳しく説明するなら、at a nursery school とする。

③ アウトプット

- ・ 後日、生徒自身の職場体験記を書かせた。リプロダクションで覚えた文を全て使えたわけではないが、上記の作業で文章構造を理解し、覚えた職場体験記を書く上での共通の表現を利用しながら、短時間（清書を含め2時間）でよく取り組んでいた。必要な表現を辞書で調べたり、教師に質問したりしながら作成していた。1年にわたるリプロダクションの積み重ねにより、自分で考えることが当たり前になり、能動的に作業を行う様子が見られた。

自ら進んで伝え合うという視点から

- ・ 4人のグループ学習は生徒が1年生の時から行っているが、話し合いをすることで作文が苦手な生徒たちも英文のヒントを得て、作業ができた。教え合い、助け合うということが当たり前であるという感覚を身に付けさせるためには、早い段階から教師の側が授業の環境を作ることが大切だと再認識した。
- ・ 事前にスパイラルな反復学習を行い、英文をグループで共有することで、最後のクラス全体での話し合いの時にも、あまり英作文を得意としない生徒たちも自信をもって発言する様子が見られた。

イ 課題

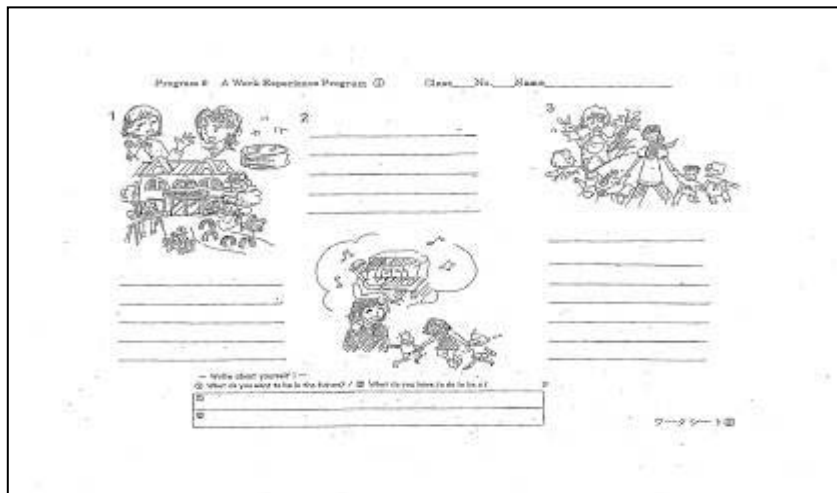
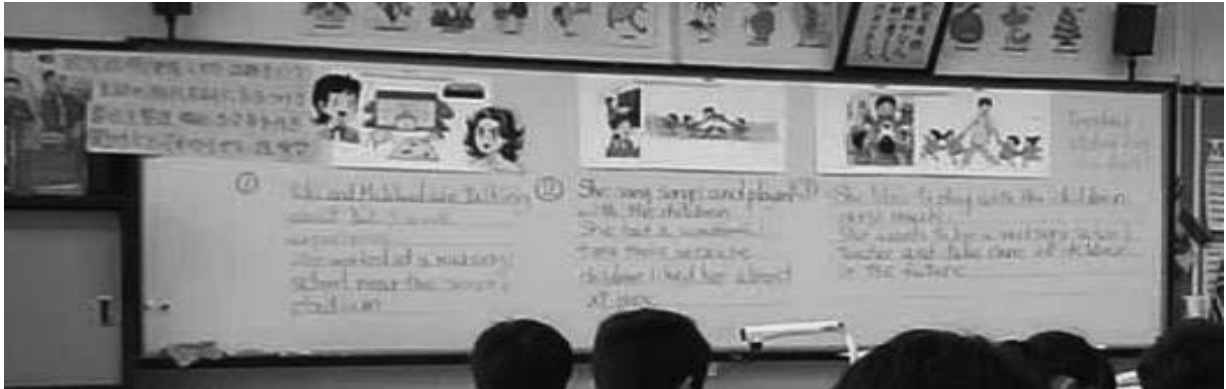
- ・ 生徒のリプロダクションシートの作文、後日行った職場体験記の英作文を見ると、音声インプットを十分に行っているのに音では理解しているのだが、音声を正しい綴りで文字にできない誤りが多かった。日常的に単語テストや dictation の小テストを増やすなど、繰り返し学習させ、定着を図っていく必要がある。

Ex) work experiense / nursary school / stadiam

- ・ 過去形にすべきところを音の記憶に頼って現在形で書いてしまうなど、文法の定着不足に起因すると思われる誤りも目立った。英文を読んだり書いたりするときに時制を意識させるよう指導していく必要がある。

Ex) She sang songs and play with the children.

- ・ 段階的な指導により、文章構成や基本的な英語表現等はよく定着し、生徒の学習意欲も高まっているが、検証授業後に実施した記述式アンケートを見ると、まだまだ語彙も少なく、思うように自己表現できないことが、生徒のアウトプット活動への抵抗感となっていると思われる。スモールステップを踏むことで、ある段階までは目に見える形で成果を上げることができるが、生徒の英語活用力を高め、自信を付けさせるには、限られた授業時数の中でも、インテイク(習熟)のための活動時間を意識的に継続的に教師が確保する必要がある。



写真↑

リプロダクションを行う
上での約束事をホワイト
ボードに貼っておく。(ホ
ワイトボード左上)
クラス全体で意見を出し
合いながら説明文を完成
させる。

←ワークシート②

VII 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 段階的指導モデルの提示

生徒が、アウトプット活動（「話すこと」「書くこと」）に積極的に取り組むようにするための段階的指導（スモールステップ）にどのような要素を含むべきか協議し、生徒が「考えや気持ちを伝え合う」ことができるようにするモデルを示すことができた。

(2) 目標を意識した授業への授業改善

検証授業を段階的指導チェックリストに合わせて考えていく過程で、普段授業で行っている活動について目的とポイントを考え、「考えや気持ちを伝え合う」という目標のために、活動のねらいを定めていくことができた。

(3) 生徒のアウトプット活動への抵抗感の減少

段階的指導チェックリストを活用した検証授業では、ねらいに即したアウトプット活動を設定し、その結果、検証授業者が従来行っていた授業に比べ、アウトプット活動への抵抗感が減ったと事後の生徒へのアンケートで確認された。

(4) 4技能のバランスよい育成

段階的指導のチェックリストを作成した際に、インプット活動（「聞くこと」「読むこと」）からアウトプット活動（「話すこと」「書くこと」）という4技能を含めた流れを考えたことにより、教師の指導が4技能を自然と包括したものになり、4技能をバランスよく育成することにつながった。

(5) 習熟（インテイク）の重要性の理解

段階的指導を行う中で、習熟（インテイク）の重要性を学ぶことができた。検証授業2ではリプロダクションを行ったが、段階的指導を行った結果、生徒が無理なくリプロダクションに取り組む姿が見られた。これは「授業の組み立て」（16ページ）の表で示したように、オーラル・イントロダクションや音読活動、英問英答等、教科書本文を繰り返し指導し習熟させた（インテイクさせた）結果である。

2 研究の課題

段階的指導（スモールステップ）チェックリストを活用する際、5ページに示したように、その授業（単元）の目標を定め、目標達成のために各活動を設定することが大切である。目標を忘れ、チェックリストの遂行だけに意識を向けてしまうと、教師の指導が焦点の定まらないものとなってしまい、本時の目標達成へつながっていかない。今後、CAN-DOリストの視点を踏まえて、教師と生徒が外国語学習の目標を共有しながら、学んだ英語によって何ができるようになるのか軸をしっかり定めて、授業を組み立てていく必要がある。

今回、段階的指導チェックリストの検証は1授業と1単元という単位で行った。今後はこれに留まらず、各学年の終わり及び卒業までにどのような生徒像を理想として指導を積み重ねていくのか、より大きな単位で考えていく必要がある。

平成26年度 教育研究員名簿

中 学 校 ・ 外 国 語

地区	学校名	職名	氏名
中央区	日 本 橋 中 学 校	主任教諭	大沼 俊太郎
世田谷区	梅 丘 中 学 校	教 諭	内野 智佳子
荒川区	原 中 学 校	主任教諭	駒澤 正人
練馬区	光 が 丘 第 四 中 学 校	主任教諭	◎中尾 真紀
足立区	第 四 中 学 校	教 諭	山岸 恒一
八王子市	第 七 中 学 校	教 諭	薄 井 亮
日野市	日 野 第 一 中 学 校	主任教諭	磯 美智代
東村山市	第 五 中 学 校	教 諭	長澤 康彦
国分寺市	第 一 中 学 校	教 諭	○本多 光三
東大和市	第 一 中 学 校	教 諭	片岡 麻貴

◎ 世話人 ○ 副世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課
指導主事 窪田 香

平成 26 年度
教育研究員研究報告書

中学校・外国語

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成 26 年度第 186 号〕
平成 27 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 正和商事株式会社